
大きな銃に小さな手

九条 ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな銃に小さな手

【Nコード】

N6906Y

【作者名】

九条 ネギ

【あらすじ】

近年、裏社会で最も恐れられた殺し屋。片手にマグナムと、黒いコートがその特徴とされる『カフィン』が、突如姿を消した。彼が消えた後、最強の席を一人の少女が埋める事になる。この少女は、一体……？

懺悔という名の自己満足

ごめんなさい。　ボク、悪い事をしました。
何って、簡単だよ。　ボクが君に、悪戯をした。
壊しちゃった。　捻じ曲げちゃった。

その頭は飾りか。　ボクの頭はただの飾りだ。
君の頭もただの飾りだ。　ボクから見れば。

頭どころか、ボクに身体は飾りでしかない。

君が大好きになったから、ボクに合わせて君を変えた。
さて、君の身体はどうなったのでしょうか？

朝起きたら。　事故に遭って。　気を失って。
いつの間にか。　知らないうちに。　気付かない内に。
君はボクの都合で、作り変えられたんだよ。
風を流れる。　小さく弱い悪魔の手にかかってね。

『君は、何も知らないお姫様になったんだ。　ボクの気まぐれに
当てられて』

懺悔という名の自己満足（後書き）

ぶっちゃけ、第三部辺りまでは暗いだけで面白みが無いかもしれないです。

ぼやきと言つ名の自己満足

「ブルーノの額に弾丸を撃ち込め」

依頼主は、確かにそう言った。本日のターゲットは、ブルーノと呼ばれる金髪の男。写真の通りの奴に弾丸をねじ込めば、俺の任務は完了だ。

彼はその気に入っているコートに身を包み、事務所の外に止めてあったバイクにまたがった。闇にその黒髪を馴染ませ、その青い瞳は闇に浮かぶ猫の瞳の如く。異様な雰囲気を放っている。

キーを捻り、エンジンを掛けると同時。音も無く、彼は闇の中へと姿を消した。

月明かりの下で、素早く動き回る小さな影。それは、ビルの屋上から見ている所為かもしれない。

時折、火花を撒き散らすその黒いコートの男は、次々に警備員達をなぎ倒すとビルの中へと侵入した。傷など、一切負うことなく。まるで余裕の表情を崩しそうに無い。ただ、この表情は彼が明日起きた時には消えているだろう。ボクの手によって。

「中々、強いんだ」

ビル風によって吼えるような音が響く。ビルの屋上のアンテナから逆さにぶら下がる彼女は、楽しげに小さく呟いた。

「侵入者だ、銃を持つてるぞ！」

彼の侵入した一階では、大騒動が起きていた。いまこのビルの中では、とある兵器製造業者のパーティーが行われている。それを聞けば、恐らくは誰もが『兵器製造業者の主要人物を殺しに来たに違いない』と、思うことだろう。

全く持って、その通りだった。

彼は歩みを一切止めることなく、それどころかその直進を維持したまま。的確に敵の急所にその弾丸を次々と撃ち込んでいく。彼の通った後には硝煙の、死の匂いが残されている。

使っている銃は、至って普通。

特注品ですらないだろう。ただの、マグナム。それも、型にはめられて量産されている。身分証名称を持って銃器を扱う店へ買いに行けば誰もが購入可能であろう代物だった。

「俺は、お前らの頭……ブルーノに用がある。死にたくなけりや、道を明ける」

彼の一言は、とても青年とは思えないものだった。

逆らえば、殺される。それが、殆ど確定している。並の人間で、太刀打ちできるような相手ではない。

銃を取り上げたとしたら？ いや、無理だ。奴はまだ武器を持っている。

それから、たった十分間の出来事だった。彼は標的の居るフロアに到達し、その銃の引き金に指を掛ける。標的の横に居るボディガードも成す術は無く、ただ見守るだけだった。

「見つけたぜ、ブルーノさんよオ。面倒臭かったぞ、雑魚の相手は」

その銃口の先には、金髪の男が。無念といった様子で、立ちすくんでいた。

「貴様……カフィンか!？」

その男の口から、そんな言葉が吐き出される。

「ああ、俺はそう名乗った覚えは無いが。そう呼ばれている。

……俺も、使われる人間なんだ、悪く思うなよ」

爆竹のような爆発音が、そのテーブルに並んだワイングラスを貫き、砕く。

銃口から吐き出される小さな衝撃波に、彼の黒髪が揺れる。青い瞳は、瞬きをすることなく。その弾丸が、ブルーノの額にめり込む所まで。そして、紅い液体を吐き出す所まで。ハッキリと、その瞳で確認する。

「さて、任務官完了か。……そのゴリラ」

ため息をつく、カフィンがボディーガードの一人に札束を投げ渡した。相当な額らしく、啞然とするほか無い。どういう、意図で……？

「これは……？」

「仕事ご苦労さん、依頼主が死んだら報酬が無いだろ？ 大人しくしてた礼だ、俺が払ってやる。それと、早い所その馬鹿ブルーノを持って帰ったほうがいいぜ？ 俺は依頼で“ブルーノの額に弾丸を打ち込め”と言われて来てるんだ、何て弾だろうがその辺は俺の自由。さて、俺は早い所、警察が来る前に撤退させてもらうぜ」

それだけ言い残すと、彼は窓ガラスを突き破り、闇の中へと姿を消した。

ぼやきと言ひ名の自己満足（後書き）

ブルーノ・デイヴィー

性別 男

職業 兵器製造会社の社長にして、兵器の密売人

侵入者という名の自己満足

行きと同様、彼はバイクで帰宅した。音の出ないよう加工しているらしく、電気エンジンにサイレンサーをつけたような。黒いボディであるのも相まって、それは闇の中では不可視にも近いステルスの性能を発揮していた。

だが、そんな小さなことは、彼のオプションでしかない。

彼の真骨頂はその圧倒的な強さと技能にあり、ステルスバイクなどは面倒ごとを避ける無駄な小細工でしかなかった。

キーを引き抜き、事務所の敷地に入れる。事務所の鍵を取り出すと、彼は面倒くさそうに顔をしかめた。取り出した鍵は、直径五センチ程度のリングにざっと十個以上。そして、扉に設けられた鍵穴はそれの二倍。二十個。

そして、この鍵穴は単純に。一つの鍵で二つの鉤をあげるのではない。ランダムに、一つの鍵で最低一つの鍵穴を開ける。そして、その組み合わせは優に二百通りが存在する。

そして、その組み合わせはカフィンしか知らない。もし、扉を爆破して侵入しようものなら炎熱反応で作動する機関銃の餌食である。

その面倒くさい鍵をあげ終えると、彼はその瞳を凝らし、

「誰だ、何処から入った？」

闇の中に居る“何か”に対し、問いかける。傘立に、見たこともないような白い傘が刺さっている。

そして、もう一つ。“何か”がいるという情報を、匂いが伝えている。淹れたばかりのコーヒーの匂いと、もう一つ。揺り椅子の椅子のきしむような音。

……何者だ？ 開錠して入ったか……？ いや、あれを外すには相当時間が掛かる。それこそ、今しがた外出した一時間弱の時間だけで開ける事はまず無理だ。

何だ？ 『幹部』の……指令伝達であれば有り得ない事ではないが、俺に顔を合わせる決まりがある。闇に紛れていけば、俺が撃ち殺すという行為に出ても良い決まりだ。なのに、その危険を冒すのか？

そこまで考えれば、『幹部』とは関係ない部外者が、この事務所に不法侵入したと考えるのが最も理由としては辻褃が合う。

「三秒だけくれてやる、居れば居ると言え」

静かに、腰に挿していたマグナムを手に握った。

「三」

安全装置を外し、撃鉄を引く。

「二」

気配の元に、銃を向けた。

「一」

「ゼロ？ 居るよ、居る居る。チョット待って、暗くて見えなくってさ」

高い、女の声。そして、闇の中を慌しく歩き回ると、どういうわけかその女は壁を叩き始めた。一体、何をやっている？

二秒ほど叩き続け、突然。事務所の電気が点いた。

どうやら、スイッチを探していただけらしい。

「いやー、久しぶりだね。アレン」

明かりがついた中に立っていたのは、金髪の少女。どうしてだ？

「何で、俺の名前を知ってた？ ……何処の人間だ？」

アレンの言葉に、彼女は特に怖がる様子も無くテーブルにおいてあった写真立を手に取った。アレンの、幼い頃の写真。孤児院の仲間と、一緒に映っている。

目の前の彼女と同じ、白いコートの女の子。 ……誰だ？

「まさか、ユリアか？ ……よくここが分かったな、どうやって調べた？」

アレンは驚いたようにユリアと呼んだ少女に向けていた攻撃的な視線を引っ込めた。久々の、客。

それも、自分と同じ人間が来ることなど滅多にない。
殺し屋でも少し、嬉しかったりする。

「いや、ボクはアレンを探してたわけじゃ……無いつて言えば嘘になるかな。ボクさ、君と同じで殺し屋……やってるんだけど……」

楽しげだった彼女の表情が、一気に曇る。どうやら、個々に来た原因を話したくは無いらしい。だが、話してもらわなければこつちも状況の把握が出来ない。

「どうした？ 俺を殺せって依頼でも受けたか？」

アレンは冗談混じりにユリアに問いかける。だが、ユリアからの返事は無い。

むしろ、冗談を言う前といった後で、明らかに。ユリアの表情は曇っていた。

「……そうなんだ。ボク、君を殺せって依頼を受けたんだよ」

「んあ？ マジだったか、そうか。んあッハッハ！ 大丈夫だ、殺そうとしても返り討ちにしてやる」

アレンは楽しげに笑うと、ユリアの表情が少し楽になったような気がした。

そのまま、アレンは言葉を続けた。

「構わないぜ？ 俺は、誰にも殺されねえ。……お前も、殺すつもりはねえよ」

そんな言葉と同時だった。……殺人鬼という生き物は、敵であればどんな人間に対してであれ。非情になれるものだ。

手に握ったままだったマグナムの銃口を、一瞬の内にユリアの胸元に向けたかと思うと、発砲。赤い液体が飛び散り、ユリアの身体は仰向けに倒れた。

「……な、殺しちゃいねえだろ？ 少し痛かったかも知れねえけどよ、俺は人を殺すつもりはねえよ」

アレンの言葉の直後、ユリアは驚いた様子で起き上がった。

ユリアの胸元を紅く染めるそれは、油性マーカーのような匂いが

する。ペンキではないようだが……ペイント弾？

「今日の依頼も、そうだ。結構強い麻酔仕込んであるが、殺傷力は殆どゼロだ。痛かったらごめんな」

「いつも、こうやって誤魔化してきたの？」

ユリアの問いに、アレンは楽しげに頷いた。アレンが頭を上げると同時、ユリアは目の前で。アレンの胸元に銃口を突きつけていた。

アレンの銃は、アレンの手に。つまり、この銃はユリアのもの。

「悪く思わないでね、少し痛いだけだから。仕返しだよ」

発砲音。そして、銃口から立ち上る煙。確かに、死にはしないが少し痛い。

「……なんだよ、お前も……ね？ ずいぶん……強い麻酔……だ……な……」

その言葉が終わる前に、アレンはうつ伏せに床に倒れた。

「あれ？ ……実弾と間違えたかな？」

性転換という名の自己満足

夜中、突如アレンは目を覚ました。それは、シャワールームから聞こえてくる水の音が原因というわけではない。

寝かされていたソファ横の机に『シャワー借りてるよ』という書き置きがある辺り、どうやらユリアの訪問は夢オチというわけではなさそうだ。メモを抑えていた自分の銃を引き出しにしまつと頭を抱え、ソファにもう一度倒れこんだ。

床に倒れたと思ったが……よく持ち上げられたな。まあ、俺にそこまで物凄い体重があるわけではないが。むしろ、軽いくらいか？

にしても、即効性ってだけで結構弱い薬だったか？

「う……気分わりい」
思わず、そんな言葉がアレンの口から漏れる。

何だ、気分が悪い。酒を飲んで酔ったような……酒なんて飲んでねえぞ？

そんなことを考えている間にも、気分の悪さから発展したのか。頭痛がアレンを襲う。が、頭を抱えることしか出来ない。そうしている間にも、痛みは頭どころか、腹部を中心に。全身が焼けるような痛みが彼を襲う。

「マジで……どんな薬仕込んでたんだよ……」
損な小さな吐き出すような言葉とともに。アレンは一瞬痙攣したかと思うと、気を失った。

「うー……」

気がつけば、どうやら痛みは引いたらしい。全く、どんな強烈な麻酔しこんでたんだ？ あの弾丸。

ソファから起き上がると、視界に違和感を感じる。そして、顔の横から降ってきた黒い。長い髪の毛。

これは……一体？

「あ、目が覚めた？」

アレンに押し掛かり、ユリアが笑顔で拳銃を向けている。

「うわああああああ！？」

……まったく、事務所の中で銃向けるの止めるよ。侵入者に銃を向けてるわけでもなければ、俺を殺そうとしてもう撃つたろ？ 殺さない所を見ると、多分、ユリアの依頼弾丸を撃ち込めだとかそんなところなのだろう。

「つか、いい加減俺の上から下りろ。」

「中々、可愛い服でしょ？ 私の……学校の制服」

制服？ いや、普通にコート着てるだろ？ お前……。

「いや、それコートだろ？」

ここでようやく、アレンは自分の声の異変に気付く。明らかに、高くなっている。そして、この長い髪。

導き出される答えなど、知れている。どういう経緯でかは謎だが、現時刻を持って。殺し屋、『カフィン』は女の子になった。

と、言う事だ。

「何だよ……これ……」

戸惑うアレンに、追い討ちを掛けるかのごとく。ユリアはアレンの服を指差している。

「私の学校指定の、制服」

アレンは恐る恐る、自分の身体を見下ろした。……よく分からないが、明らかにこれはスカートなるものである。そしてここでユリアの方が目線の高い事に気付く。身長が百六十程度のユリアよりませんが低いのは、何だかショックだ。

「……一個断っておくが、俺は服装のことを言ってんじゃねえ」

大急ぎで事務所の中を駆け抜けけると、洗面所の鏡に向かう。

「……これが、俺かよ」

アレンの自分を見た第一声。透き通るような、ソプラノの通る声が、洗面所に響く。

「可愛いでしょ？」

追いかけてきたユリアの口調。そしてその表情は、明らかに何かを“知っている”と言っていた。

「お前……その顔はどうしてこうなったか分かってるだろ……」

「うん、昨日打ち込んだあの弾丸。あれね、ナノマシンで身体を最適化する効果があったんだ。まさか、女の子になるとは思わなかったよ」

ナノマシン？ また新しいのを開発したのか、あの馬鹿研究機関のイカレ学者ども！

「……最悪だ、今日は緊急招集があんのに」

先読み不能と言つ名の障害（前書き）

さてさて、この辺からネギは暴走しようと思ひます（笑）
なにがどうなつたらこうなつた のノリが若干この辺から入ってくる予定

先読み不能と言つ名の障害

「召集？」

ユリアは不思議そうに、アレンを見た。

「ああ、詩人の幹部から、スカウトを受けた。 “うちで働かないか” って」

アレンの言葉に、ユリアも納得した様子で手に持っていた銃を腰に挿す。

「成程。確かに、カフインは殺し屋の最上位とまで言われているからね。 ミンストレルからスカウトがあつても不思議じゃないし……今までに何度もあつたんじゃないかな？」

「ああ、いままでずっと断り続けた。今回は、条件付でオーケーしてやったけどな」

ユリアの制服の上着を脱ぐと、アレンはいつもの黒いシャツを着ようとするが、中々着れず、着るのに手こずり、腕を通してきたみたものの、ダボダボでサイズが合っていない。

が、構わない様子でスカートを脱いだ直後。 彼は。 いや、

彼女は赤面した。

自分の穿いていた物をみて、絶句する。

「可愛いショーツでしょ？」

黙っている彼女に、ユリアが言い放つ。

「何着せてんだ、俺はお前の着せ替え人形じゃねえぞ！？」

「いやーん。怒らないでよ、怒っても可愛いだけで怖くないけど。 安心してよ、その辺のコンビニで買ってきたものだから」

く……クソ……。完全に、舐めきつてんな、ユリア。

再起動してショーツを脱ぎ捨てると、いつも何時も通り。 自分の着ている服装で、黒いコートを羽織るが中々どうしてこう様にならないのか。

男の時との身長差が十センチ以上あるため、明らかに変だ。

鏡を見て、アレンは思わず黙り込んだ。そして、数秒の空白の後、口を開く。

「なあ、これ戻せないのか……？」

悲痛な、一言。 それに対し、ユリアは笑顔を向ける。

「戻せるよ」

予想外の答え。

「ナノマシンを、もう一度打ち込めば良い。ただ、撃ち込んだ時と同じで痛いけど良いの？」

ユリアの言葉に、アレンの表情が一気に晴れる。

「痛みは、耐えればいいだろ？ 戻してくれよ」

アレンの答えを聞いて、ユリアは携帯電話でどこかにメールを送る。

「一応、確認とっておかないといけないから少し待って」

そして、その十分後。ユリアの携帯の着信音の後、ユリアは無言でアレンに頭を下げた。

「ごめん、無理だった」

予想外の答え。

「戻せるんじゃないかったのかよ！？」

アレンが半ば叫ぶ。 が、怯むことなく、

「戻せるように造ってあったはずだったんだよ。けど、打ち込まれた後もナノマシンは増えながら進化を続けちゃうから。ボクたち人間の予測と頭脳じゃ、どう進化したのを破壊するか。先読みして破壊するのは無理なんだって。それに、もう一度打ち込んで戻そうとした被検体が全滅したって報告書まで画像添付してきてる」

ユリアの言葉に、再びアレンは落ち込んだ様子で事務所のソファに腰掛けると、引き出しに夜の内にしまっていた拳銃を取り出すと、腰に差し込んだ。

「……まあ、仕方ないな。死ぬモンじゃねえし、何より、詩人の連中を待たせると後が面倒だ」

先読み不能と言つ名の障害（後書き）

Minstrel

ミンストレル

直訳で吟遊詩人

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906y/>

大きな銃に小さな手

2011年11月22日05時14分発行